

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

書かれたモノ， 遺されたモノ

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相川, 佳予子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00001451 |

9. 書かれたモノ、遺されたモノ

相川 佳子子

1 はじめに

平成 17 (2000) 年 4 月に国立民族学博物館に収蔵された大村しげコレクション約 15,000 件の整理が終わった。「随筆家や料理研究家ではなく単なるもの書き」を自称し、「祖母や母がやっていた通りやっている」日常生活のなかで使われた物は「ごもく(ごみ)ではなく後々の資料になるもの、今の生活を語るもの」という視点で遺されており、両親の世代からの衣食住をはじめとして、大村しげの文筆家としての活動にかかわるもの、信仰生活を物語るものなど多岐にわたっている。20 冊を超える大村の著作は、“おぼんざいの大村”といわれるように、京都の町なかに住む庶民の食生活に関したものが多く、暮らしや手仕事についてもこまやかな筆致で綴られており、女性の目を見た京の昭和史の趣がある。そこで本稿では資料のいくつかをとりあげて、著作に書き記されたモノと遺されたモノという視点から述べてみたい。

2 『京の着だおれ』を中心に

『京の着だおれ』は『おぼんざい 京の味ごよみ』(1966)にはじまる秋山十三子、大村、平山千鶴の 3 人の著者による 4 冊目の著作で、1974 (昭和 49) 年に上梓された。内容は和服生活が当然であった著者たちが、「着だおれへん京女」のきものにまつわるさまざまを、晴れ着、はるなつあきふゆ、よそいき、つねぎ、帯のこと、小物、着はだ、お針のこと、だいじにおしやす、小ぎれでつくる、の 10 章にわけて述べている。大村の執筆は「つねぎ—京女の知恵がいっぱい」「お針のこと—きものを縫う楽しみ」に多いが、このことは衣服類として整理された約 2,400 件の資料の内容と深くかかわっており、晩年の著作である『しまつとぜいたくの間』(1995) の第 2 章「布をいとおしむ暮らし」の記述に共通する部分も多い。

資料の衣服類のなかには定形の衣服や繊維製品のほかに、大量の「はぎれ」に分類されたものが含まれている。それらは和服を新調したときに生じた余りぎれ、洋服製作の時に生じた裁ち落とし、和洋服を解いたきれ、ふとんを解いたきれなど多様であるが、最も目をひくものは和服を解いたものである。長着、羽織、帯、長襦袢、子供用のきものなどもとの形を想像できるものも多いが、何度も仕立て直してよいところのみを使用したため原形をとどめないものもある。著作と対応させて「ひっぱり」とよばれる長い上っ張りや、長襦袢の下に着る筒袖の長襦袢である「長でっば」など、いまではあまり目にもすることもなく実用的なものを知ることもできた。「母は着物ほ

ど安いものはない、というていた。」(『しまつとぜいたくの間』)と記されているとおり、よそ行きはよい生地で作って何度も染め直し「着物は晴れがましいところから、だんだん気軽なところへと移って」(同)1枚で何通りにも着られ、また、「着物が羽織になり、はんでんになって、おしまいには真綿の入ったおでんち(ちゃんちゃんこ)」(同)と形を変えて使われる。「常着は縫い直すときに、初めは前身頃と後ろ身頃を替え、(中略)最後は肩で切って上すそをひっくり返し、丈もつい丈」(同)にして仕事着になるというような記述にみえる使い回しの方法を、資料の端々にかいま見ることができる。

「母は着物をほどこいて洗い張りに出し、きっちりとしもうてあった」(同)とあるとおり、悉皆屋から戻ってきた着尺地や、胴裏、八掛などが店の附箋がついたままきちんと遺されていた。掛け布団の鏡は“ぼて”(和紙を張り、柿渋を塗った籠)にしまっている反物が利用されたと記されているが、資料に見る何枚かの鏡は、記述にあるように並幅のきもの地などのよいところを縫い合わせたもので、大正から昭和初期の流行の和服文様を彷彿とさせるものもある。大量のきれ類は「そうそうおふとんばかりもいりまへん」(同)となっていて、「そのまましまいこんで」(同)しまった結果、母の没後もそのまま収納されていたものであろう。

胴裏や八掛の資料も多い。とくに今日の目から見ると紅絹の胴裏が多い。記述には「胴裏は若いうちは赤、年配になると白にかえた(中略)あるときせつせと縫い直して、いっせいに白にする。」(『京の着だおれ』)とあり、資料の着用された時期は明らかではないが、その多くが昭和戦前期のものであると推定されるので、現在のような薄い色の着物が少なかった当時、紅絹の胴裏が一般的であったことを示している。胴裏も洗い張りや仕立て直しが繰り返されており、いたんだ部分につきを当てて修復したものも多くみられる。「わたしはまたつぎ当てが好きやった」とつぎだらけの着物について語っているが(『しまつとぜいたくの間』)、おそらく祖母も母もつぎ当ての名手でもあったであろう。その美しくそろった針目は技術の確かさを偲ばせる。八掛は常着の銘仙などにはふくりん(モスリン)が、よそ行きには錦紗や羽二重、縮緬などが使われていた。袷をほどこいたとき「胴裏と八掛にわけて、ちょっとでも布をつないだなりに洗うほうが洗いやすいし、干しやすい」(『京の着だおれ』)と家で洗い張りをするときの便法に述べられているように、縫い合わせた状態の八掛もあった。同じところで「ぬきそ」についても語られているが資料中には見出せなかった。冬のきものは10月は袷、11月12月は裾綿、1月2月は綿入れ(同)とあり、未使用の裾綿用の綿が遺されている。

資料の中に木製の針箱がふたつある。母と祖母のものであろうか。針箱は上に蓋があって、蓋をあけると針刺しや糸巻きが入れてあり、下はどちらにも大小4つの引出しがついている(写真1、収集番号11504)。著作の中にはそれがこどものころには



写真1 針箱

宝箱のように思えたこと、引出しに入っていた小さいいくつかの塗りの小箱、文様のついた木の糸巻きや大小の握り鉄にまつわる思い出が述べられている。そして「母の針箱は、そっくりそのまま私のものになって、いまもだいに使っています」とある（『京の着だおれ』）。針箱の中には裁縫に必要なさまざまなものが入れられていた。その中のひとつ、23個を越える縫い針の包み（写真2、収集番号9864）はお針が好きだった母の技術を語るものといえようが、同時に有名な「みすや針」についても知ることができる。

元禄初期に刊行された商人職人などの図説書として知られる『人倫訓蒙図彙』の巻五、縫針師の項には「都において、根本姉小路に住してその名高し。中世御簾屋といふものあり、今にいたりてこれを名乗る。（中略）京針師、三條河原町角福井、富永伊勢、井口大和、五條油小路…」とあり、1883（明治16）年の『都の魁』には針商



写真2 種々のみすや針

の部に、三条通り寺町東入る本家みすや福井藤原勝秀、および、無類御はり所本家みすや寺町通五条上ル町辻井茂七の名が見える。資料の針包みはきぬゑりしめ、つむぎゑりしめ、もめんつぎ、もめんぬい、大くけ、小ちゃば、中ちゃば、四ノ三、三ノ三、三ノ一で、それぞれの包み紙には正本家美寿屋針、本家みすや針、本みすや針などと記されていて、店舗の所在地も松原通柳馬場、五条柳馬場、寺町通五条、五条通御幸町、千本通下立売とさまざまであった。このことは中世以来の伝統を受け継ぐ「みすや針」が昭和になっても作り続けられ、京都の和服産業の一端を担ってきたことと同時に、品質のよい縫い針の代名詞となっていたことを物語るものであろう。16工程もあるという手作りのみすや針は現在は姿を消してしまったという。

和服が日常着であった時代、春になれば冬に着たものをほどいて洗い張りをし、縫い直すことが主婦の大切な仕事のひとつであった。上等な絹物は悉皆屋に出すが、ふだん着などは家庭で洗い張りをするため、張り板や伸子針は必需品であった。へら台、くけ台、裁縫用の鋲もあり、こうした衣服の製作、手入れ、使い回しを通して母親達は季節の移り変わりのなかで、娘たちにその技とともに着物を着る暮らしの美意識を伝えたのではなかろうかとの思いを強くする。

3 『京の手づくり』を中心に

『京の手づくり』は1974（昭和49）年に講談社から出され、1980（昭和55）年に講談社文庫で再版された。内容は京都で生産されている36種の手づくりの品々をとりあげて紹介したもので、その選択は“暮らしに近いところから”であり、選ばれたのは“肌にいちばん密着した、だいじな項目”であった。この著作には当時の京都のい

わゆる伝統的産業をめぐる動きが背景にあったものと思われる。1974（昭和49）年に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が公布されるが、このうち京都の工芸に関する著作の出版が相次いでいる。すなわち

| | | |
|-----------------------|-------|-----------------|
| 吉田光邦編『日本の伝統工芸 第1巻 京都』 | 講談社 | 1976（昭和51）年 11月 |
| 京都新聞社編『京都手仕事のうた』 | 京都新聞社 | 1983（昭和58）年 1月 |
| 吉田光邦他編『京都の工芸 伝統と現代』 | 平凡社 | 1984（昭和59）年 6月 |

などがありほかに単独の産業を扱ったものに以下の著作がある。

| | | |
|------------------------|--------------|----------------|
| 西陣五百年記念事業協議会編『西陣 美と伝統』 | 西陣五百年記念事業協議会 | 1969（昭和44）年 3月 |
| 京都絞工業協同組合『京鹿の子 美と伝統』 | 京都絞工業協同組合 | 1975（昭和50）年 4月 |

『京の手づくり』に取り上げられた品々のうち、食品を除く多くの品がコレクションの中にみられる。かんざし、伏見人形、しんし、組みひも、しゅろぼうき、晴雨人形、蛇の目傘、葎のすだれ、籐細工、お茶碗、耳かき、京だんす、扇、いかき、おひつなどである。次にそのうちのいくつかを取り上げて、著作とともにみてゆきたい。

[しゅろぼうき]

三条大橋の西詰にある1818（文政元年）創業の老舗である内藤さんで作られている小さいしゅろぼうきを著者は何本も使っていた（収集番号3177～82 4171～72）。

「大小さまざまのぼうきやきりわら類はどれを見てもほしいものだらけである。きりわらというのは、昔のたわしで、しゅろを束ねて、銅の針金でぐるぐると巻きつけ、両端が使えるようになっている（写真3）。きりわらの太いのは、梅雨の間にかつお節にかびが生えたりするとそれでこすってかび落しをし、みがく。うれしいのは小さいきりわらで、小ゆびくらのから中ゆびくらのまでいろいろの大きさがある。自分の使いみちによって選べばよいけれど……」（『京の手づくり』）とあり、それらは、はね落し、入れ歯洗い、ウールのきものたもとくそを払うときなどに使い、走り（流し）に置いてある小さいきりわらは、おろし金の目、茶碗や湯のみの糸底洗いや、おろし金の目につまった袖子を払うときにも使うという。長火鉢の銅壺を掃いていた小さいぼうき（写真4）は火鉢履きの用途が減って、同じものが窓のみぞ掃きに、走りに置いたものは深い湯飲みや佃煮の空きびん洗いによく、荒神ぼうきは堀りごたつのなかや、机の上の塵を掃く。その外、釜洗い、柄付きたわし、さいはらい（はたき）として、しゅろぼうきは多用されていた。『京暮し』では、かまどのまわりを掃くしゅろ

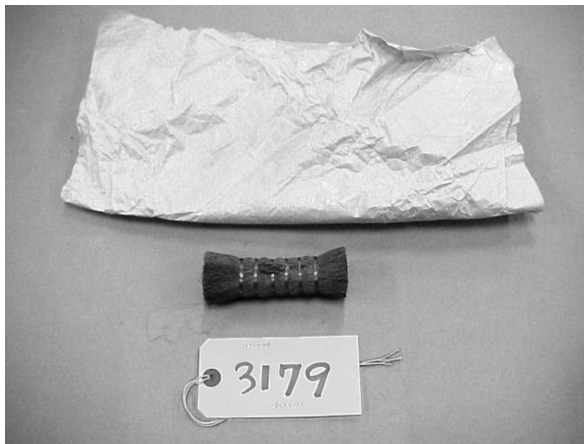


写真3 きりわら

の小さいほうきであるかまほうきを、鏡台や机の横にも置いていたと述べている。『都の魁』の「箒商の部」に榎欄箒と縄製造に携わる商店名があげられており、下京六組中島町内藤利兵衛の名がみえる。

[蛇の目傘]

「雨が降ると、わたしはむしょうに出歩きとうなる。きものを常より短いめに着て、蛇の目をさして、利休をはいて……」「わたしは雨の京都が好きである。そして、蛇の目をさして歩くのが好きである。そやから、蛇の目の傘がなんぼでもほしいなって……」（『京の手づくり』）の記述にあるとおり、収集番号 12132 のやや大型の下駄箱には、蛇の目傘と多くの履物類が収納されていた（写真5）。ほとばの無双、紺の蛇の目、目の覚めるような深紅の傘、ひわの柄風のもなどで「知らん間に傘の道楽になってしまった」とのこと。収集番号の 12191, 12194～96 の 4 点はここに記されて



写真4 小さいしゅろぼうぎ 3種



写真5 両開きの下駄箱 蛇の目傘と履物類の入った箱が収納されている。



写真6 蛇の目傘 重子(上)しげ(下)の記名がみえる。



写真7 白木の御殿と雛人形

いる品であろう。12195には「重子」、他には「しげ」の記名があり(写真6)、著者の思い入れが伝わってくる。岐阜で作られるものとばかり思っていた蛇の目傘を、京都でも張っている店があると知ったときは、「飛び上がるほど」うれしく、その後、その店で合羽を和紙に、手元を簾に巻き替えてもらい、雨を待ち遠しく思ったという。

雨の日はきものは利休(日和下駄の一種)、「利休というのは、いまでこそ雨降りのはきものになっているけれど、元は、降りみ降らずみとか、曇りがちで、なんどき降り出すかわからないようなときに履いて出て、まあ、晴雨兼用の元祖みたいなげたである。千利休さんが愛用なさったのでその名があるのやと」とある。そして普通はそのまま履き、雨が降り出すと、向掛け(爪皮)をかけ、本格的な雨降りのおときには高下駄を履くと記されている(『京の手づくり』)。コレクションのなかには未使用のものも含め、20足の女物の下駄があり、高下駄や日和下駄のほかにも爪皮のついた下駄が半数近くを占めていた。清水の舞台で墨絵のような景色を眺め、また、大徳寺や苔寺へ足をのばす…町なかに住まい、周囲の自然の風物を楽しんだ著者の生活のなかで、雨の日の外出の用意は万端整えられていたのである。

[おひなさん]

「おひなさん」と題する著作は、『京暮らし』(暮らしの手帳社、1987)、『マミール』(1987.3のちに『京暮らしの彩り』佼成出版社、1988に採録)、『はんなりと』(No.3 1987 早春 京都全日空ホテル)にみえる3つの文章がある。ひなの飾り方、ひな板やひちぎりという京都特有の節句料理や菓子について記され、人形の寺も紹介されている。

コレクションには白木の御殿(写真7、収集番号8724)と雛人形、桜と橘、ほんばり、蒔絵の雛道具と白木の勝手元(ミニチュアの台所、京の通り庭の炊事場のを再



写真8 白木の勝手元

現したもの、写真8、収集番号8403)などがあり、雛人形は一对の内裏雛と三人官女、2人の隨身、三人仕丁で、今日のような15人揃いではない。白木の御殿は大正時代の流行だったといい、その組み立ては大仕事であったため、祖母が入れたという合い印が残っている。蒔絵の道具類の多くはいまもみられるものであるが、造りは精巧である。

雛遊びや雛道具については平安時代にすでにみられるが、3月の雛遊びは江戸時代初期からといわれている。江戸時代後期の雛遊びについて『守貞漫稿』（第23編春時）では京坂と江戸にわけて次のように記している。まず京坂は雛壇は2段で赤毛氈を掛けて、上段には無屋根の御殿をかざりそのなかに夫婦一对の小雛を、階下は左右に隨身2人と桜と橘を並べて飾るのを普通とする。調度は箆笥、長持、庖厨の諸具を飾る。江戸では雛段は7～8階で上段に雛屏風を立て回して夫婦雛を飾り、下の段に官女などを置くが江戸では必ず五人囃子（申楽の囃子）の人形を置く。以下の棚には琴琵琶三弦、将棋双六の三盤、御厨子棚、黒棚、書棚、見台、箆笥、長持、挟箱、鏡台、櫛篦などを飾るが、みな必ず黒漆塗りに牡丹唐草の蒔絵があるのが普通で、定紋入りや梨子地蒔絵など善美を尽くしたものもあって京坂より華美であるが、庖厨の具は稀であるという。

資料の特色として 御殿かざりであること、五人囃子がないこと、台所の諸道具（勝手元など）をかざることが指摘でき、大村家の雛人形、雛道具は江戸時代後期の京坂の雛遊びの形式を残すものといえることができる。

[うちわと扇子]

「冷房がからだに合わないわたしは、真夏でもうちわでばたばたと風を送る。(中略) やっぱりわたしには、うちわのやわらかい風が、からだに合っているらしい」(『京暮

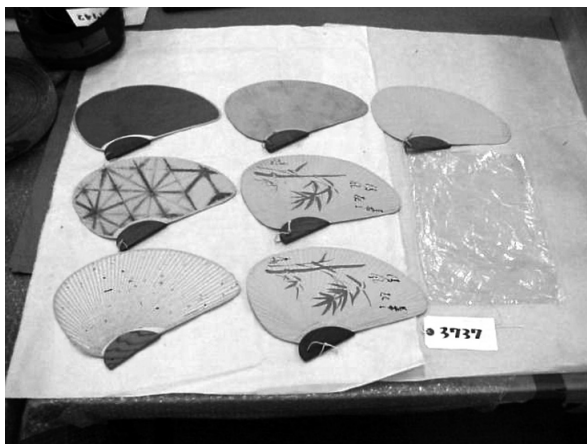


写真9 京うちわ（扇型）

し]). うちわには太い竹を必要な長さに切り、2～3センチの幅に割ってから先端を細かく裂いて作った「平柄うちわ」と、細い竹の両端を切り、先端を細かく割って作った「丸柄うちわ」、細い竹ひごを並べて両面に紙を貼り、あとから柄を差し込んだ「京うちわ」がある。京うちわは「差し柄うちわ」「みやこうちわ」ともいわれ、房州の丸柄うちわ、丸亀の平柄うちわと並んで日本の代表的なうちわのひとつとされている。平安時代の辞書『和名類聚鈔』ではすでに「阿布岐」(扇)と「宇知波」(団扇)を区別しており、扇が宮中の儀式や服装に関係したものであったのに対して、団扇はもっぱらあおぐための道具であった。遺されたうちわは多様なもので、上等な京うちわ(写真9、収集番号3737)のほかに、出入りの商店や花街の女性の名入りのものも数多く、父の仕事とのかかわりを示している。京うちわの製造に関して「西陣グラフ」(225, 1975.7)に「京の職人さん」と題した大村の一文がある。

「暑い間、わたしは上品な女物の扇子よりも、実用一点張りで、大きい男物の扇子を使う。なるべくあっさりした模様のもので、無地に近いものを選ぶ。ごつてりと山水などの模様はおんなには似つかわしいない。そして、秋口からは、女物に取り替える。そろそろ涼風が立つと、いつまでも夏物では、やぼったい。はぎかききょうの季節の花がよう合う」(『京暮し』)とあり、近ごろは年中持っているのがよいから、季節に合ったものを持っていたいと続く。また、扇子のよれよれを持っているほど、しみたれたものはないというこだわりを述べ、扇子のおしゃれも楽しいとしている。資料の扇子は二大別される。一は著者が生前に使ったものと思われ、大多数が女物で、天保年間(1830～44)創業とされる老舗の品であった。他は菩提寺である岐阜の東光寺の僧侶の洒脱な画賛の入ったもので、その多くは未使用のまま遺されている。これらは『京暮し』のなかの次の文章とかかわるものであろう。すなわち「お正月、僧

堂の雲水さんは、大般若経のお札を持って、信者先へお年始に回られる。そのとき、どなたも皆、大きいお扇子にお札をのせて、差し出される。その扇子はたいてい、僧堂の老師の墨跡のもので、新春にふさわしい文句が書いてある。」と述べている。毎年贈られ新品の状態でも遺されている40本を超える扇子は、大村家の信仰生活の一端を伝えていると言えよう。東光寺に関係すると思われる僧侶たちによる書画は、他にも短冊、墨書、墨絵など多数遺されている。

4 大村コレクションと「昭和のくらし博物館」

「昭和のくらし博物館」は東京大田区に1999（平成11）年開設された。建物は1950（昭和25）年に始まって現在もなお残っている住宅金融公庫の融資を受けて建てられたいわゆる「公庫住宅」で、戦後の一般的な庶民住宅の残り少ない1軒である。中には家財や衣類がほぼそのまま遺されており、そこでの生活は大村しげのくらしと相通じるものが感じられる。博物館の開設者小泉和子は昭和の家族の情景や食事の再現を行っている（著書『昭和のくらし博物館』および『ちゃぶ台の昭和』）、それらを参照しながら大村コレクションについて考えてみたい。

昭和のくらし博物館には日本の経済の高度成長期以前のくらしがまるごと残っていると小泉はいう。茶の間の茶箆筒、ちゃぶ台、火鉢、お櫃、台所にあった米櫃や氷冷蔵庫、鹽と洗濯板、日常の行水や銭湯通い、冬用の綿入れのきもの類、いろいろな和裁道具などは1960（昭和35）年ころまでの日本人のごく普通の生活を語るものであった。小泉の1962（昭和37）年の家具の持ち物調査によると（東京都の一部、川崎市、府中市）、持っていた家具は和箆筒・洋服箆筒・整理箆筒などの箆筒類、サイドボード・食器戸棚、本箱・本棚、学習机と腰掛け、学習用座机、食堂テーブルに椅子、座食卓、客用座卓、洋応接テーブルに椅子、長椅子、火鉢、炬燵、電気ごたつ、石油ストーブ、下駄箱、つづら、行李、ベッド、簾、ブラインド、衝立、衣桁、テレビ・ラジオ・トランジスタラジオ・電蓄、扇風機・電気冷蔵庫・電気洗濯機、敷物などで、すでに洋風家具や家電製品がかなり入っていた。当時、和家具はしだいに使われなくなり、これに対して洋風家具と工業製品・家電機器が伸長しつつある状態も調査から知ることができる。昭和30年代（1955～64）は伝統的な和風生活から、洋風で近代的な生活への過渡期と見られているが、大村コレクションにみる生活財はこの時期の状態をほぼ保ち続けているとあってよいと思われる。

両コレクションには京都と東京という地域の違いや、一人暮らしの女性とサラリーマン世帯という生活形態の差はあるものの、多くの共通する部分を見いだすことができる。

衣に関する資料は大村コレクションは母によるものが主体であり、小泉家のものは



写真 10 鼻緒製作器



写真 11 廃品修理親子針と使用説明書

家族のものほかに友人・知人のものもあるというが、どちらにも和服関連の資料が多くみられる。裁縫が家事の主要なものとして位置づけられていたことは、針箱をはじめとするさまざまな裁縫道具が今日のプロ並に整えられていたことから窺うことができ、洗濯や洗い張りの道具とともに1960（昭和35）年以前の衣生活を伝えている。

戦争のかけを伝えるものも両者にある。小泉家に残る戦争は、父の奉公袋、鉄かぶと、ゲートル、国民服と戦闘帽、母の標準服などであり、焼け跡から掘り出した紅茶茶碗や、敗戦後に軍隊から放出されたアルマイトの皿などのなまなましいものもある。戦災を受けなかった京都の大村家には戦争を直接的に語る資料は少ないが、父の軍隊手帳をはじめ従軍したときの書類やゲートルなどが遺されていた。鼻緒製作器（写真10、収集番号11511）と廃品修理親子針（写真11、収集番号11513）は戦時下の窮乏

生活を思わせるもので両コレクションに同じものがみられたが、いずれも使用した様子はなかった。

暮らしのなかの伝統工芸品は大村の愛用品のなかに多くみられる。使う身になって作られたものと大村は書いているが、古くから手仕事のさかんな京都の町なかに住み、暮らしの美に特有のこだわりをもった生活から、これは当然のことであろうし、また、京都という町がそれを可能にしたということができよう。

5 まとめ

約 15,000 件の大村しげコレクションの内容は、

- ① 衣食住の全般にわたる大量の日常生活品
- ② 新聞の切り抜き、取材メモなど執筆活動にかかわるもの
- ③ 大村家の信仰生活を語るもの
- ④ 祖母、両親、しげの三代にわたる記録、写真ほか

に大別することができる。

「当たり前ことはだれもが気にとめていないので、いずれは忘れ去られることになる。その消えるものを、わたしは大事にしたいと思う。」(『京暮らしの彩り』)

「昔からずーっと続いてきた暮らしぶりも、この間の戦争のあとは、ころっと変わってしもうた。家の造りも、住まいの方も、着るものも、おかずにしてからが違ってきている。それなら、戦前のことを知っている者が、書き残すのは、その時代に生きた者のつとめではないかしらん。でないと、わたしたちの暮らしはからっぽになってしまう。わたしはそれがさびしい。」(同)という大村の生活の信条のようなものを具体的に示すのが当コレクションである。そこから見えてくるものは、朝日「婦人ペンシル会」に始まる「ひととき会」の創設とその活動を通して、一般の女性たちに社会に向けての発言の場を提供したことと、大村自身が「もの書き」として成長し、社会に認知されてゆく過程である。そして最初の著作として世に出た『おぼんざい 京の味ごよみ』は京の庶民の食卓を紹介した初めての書として版を重ね、錦市場の名を全国に知らしめるとともに、京都ブランドの「食」を生むことにつながった。また、遺された多様な品々は善くも悪くも「伝統」の上に積み重ねられた京の町なかに住む人々の暮らしの変化を語るものとして、昭和史の一側面を形成する資料とみることができる。

文 献

秋山十三子・大村しげ・平山千鶴

1966 『おばんざい 京の味ごよみ』神戸：中外書房。

1975 『京の着だおれ』京都：東洋文化社。

大村しげ

1975 「京うちわ 高野与四太郎さん」『西陣クラブ』225, 西陣たより社。

1980 『京の手づくり』東京：講談社。

1987a 『京暮らし』東京：暮らしの手帖社。

1987b 「おひなさん」『はんなりと』No.3 1987年早春号, 京都全日空ホテル。

1988 『京 暮らしの彩り』東京：佼成出版社。

1995 『しまつとぜいたくの間』東京：佼成出版社。

小泉和子

2001 『昭和のくらし博物館』東京：河出書房新社。

2002 『ちゃぶ台の昭和史』東京：河出書房新社。

朝倉治彦校注

1990 『人倫訓蒙図彙』東京：平凡社。

石田有年編

1971 『都の魁』京都：京を語る会。

喜田川季莊

1908 『類聚近世風俗志』東京：國學院大學出版部。

正宗敦夫校訂

1974 『倭名類聚抄』東京：風間書房。